

日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触 —— 日本に住み、働きつづける日本留学経験者 C の場合 ——

How the Contact with Japan Appears in the Trajectory of Life of a Japanese Language Learner: Case Study of Ex-Overseas Student C Who Keeps Living and Working in Japan

丸山千歌・小澤伊久美
MARUYAMA Chika, OZAWA Ikumi

〔要旨〕

日本では「出入国管理及び難民認定法」（入国管理局、2018）や「日本語教育の推進に関する法律」（文化庁、2019）等の法整備が進んでいる。2020 年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、世界的に人的移動が制限された年となったが、コロナ収束後には制限が解かれ、外国人の増加、それに伴う多文化・多言語化が進むと予想される。非日本語母語話者である日本語学習者が「日本語・日本社会と向き合って生きていこう」と考えるに至る径路や、そこに影響を与える要因を明らかにすることは、共生社会で重要な役割を担う親日家育成に寄与するだろう。

そこで、本研究は、PAC 分析と TEA を用いて、日本での 1 年の交換留学を経て大学を卒業してから日本に住み、働き続けることを選択して数年以上経過している元日本語学習者（調査協力者 C）が、日本での日本語学習や経験をどのように意味づけているかを考察した。

分析結果からは、協力者 C は、丸山・小澤（2018、2019、2020）と共通して、日本に住むことに魅力を感じているが、特徴的なのは、その魅力が、協力者 C が仕事や信仰のことなどの領域やそのときの状況によって話したい相手、つまり自身を知り理解してくれる人が「日本」にいて感じている点であることを確認した。また日本語については、協力者 C の日本語力やその時の状況によって、「日本語環境との接し方」を促進する記号にも阻害する記号にもなっていることがわかった。その他、日本語学習や日本語学習の取り組みについても分析を行い、留学先の日本語教育に従事する者への提案を行うとともに、今後の研究課題を整理した。

Key word: 日本留学、サブカルチャー、日本語学習、卒業後の進路、
日本社会との関係を維持



1. はじめに

日本では「出入国管理及び難民認定法」(入国管理局、2018)や「日本語教育の推進に関する法律」(文化庁、2019)等の法整備が進んでいる。2020年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、世界的に人的移動が制限された年となったが、コロナ収束後には制限が解かれ、外国人の増加、それに伴う多文化・多言語化が進むと予想される。非日本語母語話者である日本語学習者が「日本語・日本社会と向き合って生きていこう」と考えるに至る径路や、そこに影響を与える要因を明らかにすることは、共生社会で重要な役割を担う親日家育成に寄与するだろう。

丸山・小澤(2018、2019、2020)は、このような背景を踏まえ、個人別態度構造分析(Personal Attitude Construct: PAC)分析法(内藤、2002)と複線径路等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach: TEA)(安田・サトウ、2017)を組み合わせる形で、日本への留学経験を持つ日本語学習者らの人生の径路の解明を試みている。TEAは文化心理学を基盤とし、人間の文化的発達を非可逆的時間と文化社会的文脈との関係の中で捉え、記述するための方法論的枠組みで、歴史的構造化ご招待(Historically Structured Inviting: HSI)、複線径路等至性モデリング(Trajectory Equifinality Modeling: TEM)、発生の三層モデル(Three Layers Model of Genesis: TLMG)から構成されるアプローチである(安田他、2015)が、本研究はこのうちのHSIとTEMを援用している。文化心理学では「個人が日常的に相互行為を行う他者や人工物(道具)」(上村、2018: 277)を文化と捉え、「自己と文化とが相互に関係しながら個人が文化を創り上げる」(前掲: 36)と考える。文化心理学者のヴァルシナーは、「記号」を「未来と向き合う何らかの機能をもち、過去の状態から何か新しいことへと導く何か」とであると定義している(木戸・サトウ、2019: 36)。丸山・小澤(2018、2019、2020)及び本稿の一連の研究は、日本での1年の交換留学を経て大学を卒業し、日本に住み、働き続けることを選択して数年以上経過した元日本語学習者をHSIにより「お招き」し、彼らの人生の径路にどのような記号が作用しているかを明らかにする試みである。

また、TEAでは、対象者が1人の場合には個の豊かさを明らかにすることができ、4±1人の場合には多様性が可視化され、9±2人の場合には類型化が可能になることが実施者らの経験則として指摘されている(安田・サトウ、2012)。本稿では、多様化について考察する前段階として、筆者らがHSIにより「お招き」した4人のうち、調査協力者C(以下、協力者C)に焦点をあて、日本での日本語学習や経験をどのように意味づけているかを分析する。

2. 先行研究

学習者要因を通時的に捉える研究は、丸山・小澤(2018、2019、2020)で整理した通り、文野他(2006)や有川(2010)、丸山・小澤(2011a、2011b)などがある。丸山・小澤(2018、2019、2020)及び本稿もその一つとして位置付けられるが、研究手法にPAC分析に加えてTEA

を採用した点が特徴となっている。具体的には、TEM 図を介したトランス・ビューの中で、調査協力者らが日本社会と関係を持続けるに至る径路を特定するとともに、理論的にあり得た径路や、そうした径路の分岐に作用する記号の働きを可視化した。前述の通り丸山（2018, 2019, 2020）および本稿は4名を HSI により「お招き」しており、そのうち3名については個の豊かさを分析するために、一人ずつ取り上げて論じてきた。

丸山・小澤（2018）は、日本での1年の留学を経て大学を卒業し、フルタイムの翻訳者として日本で働くことを選択して数年以上経過している元日本語学習者である協力者 A に焦点をあてた。分析の結果、協力者 A が、現在の選択に至るまでのあいだに、日本語学習を欠かせないものとして位置付けていること、母国や現地の友人とのつながりや、留学先の大学職員からの仕事の依頼など、調査協力者の人生の様々な時点での出来事が、日本語学習の動機を高め、調査協力者が自身の将来を考えるきっかけになっていることを明らかにした。

丸山・小澤（2019）は、日本での1年の交換留学を経て大学を卒業してから日本に住み、英語教育に従事して働き続けることを選択して数年以上経過している元日本語学習者である協力者 B に注目した。協力者 B の径路において、ある時期までは日本語学習が重要で、それは日本で生きていく自信をもたらすための欠かせない要素となっていた。しかし、それと同時に、日本人のコミュニケーションスタイルや行動様式が協力者 B にとって「居心地の良さ」をもたらすものであったということが重要な要因となっており、また、「居心地の良さ」を感じるだけでなく、「日本でやっていける、日本で生活していきたいと思う」点に至るには、「教員や生徒との関係がよい」「公私ともにうまく行く」「色々な教師と出会い、ネットワークが広がる」といった人間関係に関わる社会的助勢（Social Guidance: SG）が働いていた。結論として、協力者 B の SG には、本人が自身の価値観に気付くことにつながる SG、日本社会に関わる SG、日本語学習を開始、または継続に関わる SG、制度に関わる SG、人間関係に関わる SG、の5種類があり、径路の要所要所で大きな影響を与えるとともに、社会的方向付け（Social Direction: SD）の影響を低減していることを明らかにした。

丸山・小澤（2020）では、日本での1年の交換留学を経て大学を卒業してから日本に住み、大学の非常勤講師、特任教員を経由して、インタビュー時は研究所の所員として勤務している元日本語学習者 D を取り上げている。協力者 A・B と同様、日本に住むことの魅力が作用しているが、協力者 D の特徴として、インターネットが発達し、言語の枠組みが地理的な区分では説明できなくなりつつある現在における日本のサブカルチャーの動向と、元日本語学習者が発信者として活躍するフィールドを模索する姿が挙げられている。協力者 D にとって強く関わりたいのは日本や日本のサブカルチャー、あるいはより広く日本の表象文化であるが、それに関わり活躍することで自己実現を果たす上で、日本に定住する必要があるかどうかも含めて模索しているということを明らかにした。その結果、TEM 図を描く上で研究者の当初研究課題に連動して「日本や日本語と関わりを持続けて、日本で生活し続けること」という等至点（Equifinality point :EFP）を設定していたが、協力者にとっての EFP である第2の等至点として「日本に住まない

としても、日本や日本語と関わって生き続ける」があることを指摘した。

本稿では、HSI した4人目の協力者Cに焦点をあてて、その径路や径路に影響を与えた記号の作用を分析することで、TEAによる多様性の可視化を論じる環境を整えたい。

3. 方法

3.1 調査協力者の概要

協力者Cはインタビュー実施当時、日本国内で常勤大学職員として勤務している日本語非母語話者で、今後も日本・日本語と関わりながら生活を営む可能性があった。概要は表1の通りである。協力者Cは、敬虔なクリスチャン家庭で育ち、中等教育で2年日本語・日本文化学習した。大学入学決定後に1年間広島の高校へ留学、母国の大学でアジア研究と美術を専攻し、在学中に1年の日本への交換留学を経て卒業した。その後しばらくしてから日本の大学院に進学（専攻は日本研究）し、修士号を取得後、博士課程に進学し、満期退学をした。大学院満期退学後は、日本に残り、非常勤で大学職員や英語教師などを経験し、数年前から日本国内で常勤大学職員として勤務している。インタビューは対面で5回行った。TEMのEFPは、前節で指摘したように「日本や日本語と関わりを持ち続けて、日本で生活し続けること」として研究を開始している。

表1 協力者Cの概要

出身地	オーストラリア
年齢・性別	30代・女性
職業	大学の常勤講師
言語背景と日本語学習歴	非漢字圏。敬虔なクリスチャン家庭で育つ。中等教育で2年日本語・日本文化学習、大学入学決定後に1年間広島の高校へ留学、大学でアジア研究と美術を専攻、1年の日本への交換留学を経て卒業。その後しばらくしてから日本の大学院に進学（専攻は日本研究）。修士取得後、博士課程に進学するが満期退学。その後、日本に残り、非常勤で大学職員や英語教師などを経験。数年前から日本国内で常勤大学職員として勤務。
母語	英語
インタビュー実施時期	1回目：2017年11月2日（約5時間、内インタビューは1時間） 2回目：2017年11月17日（約2時間） 3回目：2018年2月8日（約1時間50分） 4回目：2018年3月8日（約1時間半） 5回目：2018年6月14日（約1時間半）

3.2 インタビュー方法

本研究は、丸山・小澤（2018、2019、2020）と同様にPAC分析法とTEAを複合的に活用する。具体的には、協力者Cに同意を得た上で筆者らが5回インタビューを行った。連想語が66項目と多かったためにデンドログラム作成までの過程に時間がかかったこと、また、協力者C自らが積極的に語ってた豊かな発話を遮ることなく聞くことを優先したこと、デンドログラム（図

1) に基づくインタビューは日を改めて実施し、2 回目と 3 回目のインタビューはそのために費やした。その上で、それらの語りから TEM 図を作成するためにさらに 4 回目、5 回目のインタビューを実施した。

PAC 分析法について、丸山（2016）は、調査項目の設定の自由度が各段に高い、また調査協力者が中心となるという特徴があるとしている。この特徴を生かして、丸山・小澤（2018、2019、2020）は、インタビュー実施者と協力者とが、インタビュー実施者の協力者に期待するストーリーを共同で構築するリスク（佐藤、2015）を、PAC 分析法を活用することで低減する手順を踏んでいる。本研究も同様の理由から、TEA を研究手法の軸に据えつつ、PAC 分析法を組み合わせる。

PAC 分析で使用した刺激文は「わたしと日本・日本語の過去・現在・未来と聞いて思い浮かべるのはどのようなことですか。あなたが思い浮かべたことを言葉やイメージで表してください。書くときには思いついた順に、順位の番号を付けてください。」である。

4. 結果

4.1 PAC 分析インタビューの結果

PAC 分析インタビューは内藤（2002）の手順で進め、協力者 C は 66 の連想語を挙げた。統計処理は、重要度順に並べた各連想語の非類似度評定を SPSS version20 を用いて階層的クラスター分析にかけるという手順をとったが、その結果描画されたデンドログラムを図 1 に示す（左の数値は各連想語の重要度順位である）。

PAC 分析インタビューで、協力者 C はこれを 4 つのクラスター（以下、CL）に分けることに同意し、各 CL を次のように名付けた。重要度順 65,66,14,63,64,47,48,24,25,26,33,11,27,16,34,12 の 16 項目から成る CL1 は「Connections, Flows, Hellos & Goodbyes」、同 41,42,40,31,32,61,30,36,15,38,18,49,50,37,39,35 の 16 項目から成る CL2 は「Realizations」、の同 22,23,13,55,62,19,21,20,59,60,53,54,57,58,9 の 15 項目から成る CL3 は「Learning Japanese」、同 8,56,51,52,28,2,29,17,45,46,10,43,44,4,1,3,5,7,6 そしての 19 項目から成る CL4 は「Cultural Exchange」CL 全体を「My Life in Japan」と名付けた（表 2）。

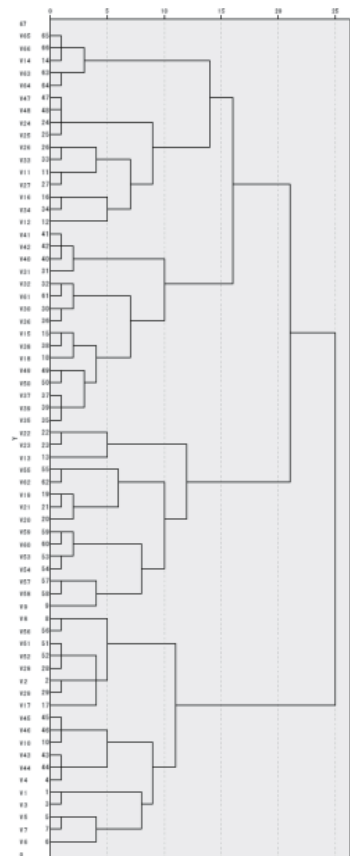


図 1 協力者 C のデンドログラム
表左の数字は連想語重要度順の番号

表2 調査協力者Cの連想語と順位、印象、およびCLの名付けの内訳

CL	CL	重要度	連想語	印象
My Life in Japan	Connections, Flows, Hellos & Goodbyes	65	Work at A	+
		66	Work at B センター	-
		14	Riding my bicycle	+
		63	Work at C	+
		64	Work at Eikaiwa (clients)	0
		47	Crossfit	0
		48	Feeling tired to meet new people (flow in and out)	-
		24	Hellos, Goodbyes, Hello again	0
		25	Rani, Ces, Ashley	+
		26	Staying in Touch (FB)	-
		33	Moving Houses in Japan	0
		11	My friend Judy	+
		27	Comfort of longer friendships	+
		16	Michiko 小林	+
		34	Being here long enough to gain & lose 日本人友達	-
		12	Calligraphy Class in D 大学	+
	Realizations	41	Looking like this & Speaking Japanese (challenges- pick battles)	-
		42	Being friends with other long term people (Christina)	+
		40	Positive Racial Bias	+
		31	Things I do when I go back (eg apologising, bowing, running on time)	0
		32	Being somewhere long enough to become a Regular じょうれんさんになる事	+
		61	Korean Food/ Indian food	+
		30	Things / People I miss about Japan	+
		36	Things like Shibuya scramble become common place	+
		15	Learning Kanji	+
		38	Universtiy E	+
		18	The 3.11 Earthquake	+
		49	Work at アート会社	+
		50	Rinpa Exhibition	+
		37	Tokyo Dragon Boat Club F	0
		39	Tokyo train network	+
		35	The scenery, smells, sights are my everyday (familiar)	+
	Learning Japanese	22	Teachers in Aust (esp G & H)	+
		23	University I's Kabuki	+
		13	SAKUBUN ! ! !	-
		55	Japanese TV (じまく)	+
		62	Japanese Movies	0
		19	Jigsaw Puzzle Idea (filling in the sky pieces) (日本語)	+
		21	Can't turn the radio channel off	-
		20	Japanese is like lego blocks	+
		59	Making friends with new 外国人	0
		60	JLPT exam	0
		53	Accompanying friends to appointments (eg medical)	+
		54	Being sick in Japan	-
		57	Being called "Japanese" 「日本人になった！」	-
		58	No holey socks, No おしり見せる (eg Japanese home visits)	0
		9	Tea Ceremony Club at 広島 High School	+

My Life in Japan	Cultural Exchange	8	Japanese Church Friends	0
		56	Sharing with Japanese Roommates	+
		51	Onsen	++
		52	Hiking	+
		28	Things I miss about Australia	+
		2	広島	+
		29	People I miss who are in Australia	+
		17	Dad's Bonsai obsession	0
		45	Karaimo Kôryû Exchange	+
		46	Floor culture	0
		10	金沢	0
		43	Fun travel experiences (eg Shikoku Udon Tour)	+
		44	Being a "tourist" with visitors ('v')	+
		4	Japanese Food	+
		1	つね先生	+
		3	自分で作った日本のりょうり	+
		5	Persimmons	+
		7	Flavors / Foods I got to know here: sesami, ponzu, れんこん、ごぼう	+
		6	きんもくせい	+

* 連想語で個人に係る固有名詞が記された部分は記号で記す。具体的には、協力者Cの過去・現在の職場名を「A」「B」「C」、所属していた大学名を「D」「E」、所属するクラブ名を「F」、所属大学の教員名を「G」「H」、とした。それ以外は協力者Cの記載のままとする。

各CLの印象について、協力者Cは、CL1を「Connections, Flows, Hellos & Goodbyes」と名付け、連想語をまとめて、協力者Cにとって「大事な友だち」「日本に来なかったら会っていない人」、この人たちがいなかったらいろいろな経験、冒険ができなかったとして、ある意味で「鍵」となる存在だと述べた。連想語から思い浮かべる友人は積極的にいろいろな経験を求める性格なのに対し、協力者Cは自ら積極的に挑戦する性格ではないことから、彼女、彼らの誘いがあって協力者Cはいろいろな経験ができ、同時に協力者Cと一緒に行動することで、友人は言語的な障壁を超えていろいろな経験ができたとした。また関係性の面では、仕事で接触する人、仕事以外での接触する人の両方が出ており、日本人も外国人も思い浮かべていると述べた。引越しまでできる新しいコミュニティとの接し方（アパートから駅までの道で会う、精肉店のスタッフとの挨拶に代わる会話等）、友人の日本再訪のたびの接触は「Hellos & Goodbyes」に関わるとし、ここでイメージする風景は、友人が笑顔で自分を抱きしめている場面だと述べた。

CL2は「realizations」と協力者Cが名付けた連想語のまとまりで、CL2の連想語から思い浮かぶことが場面たくさんあるとし、具体的に、日本の大学のキャンパスや現在の職場の同僚の顔、CL1で挙げた精肉店のスタッフの顔、ボートクラブの練習の休憩時間の様子、美術館でのアルバイトの場面、移動中の地下鉄路線図、知り合いの日本人が時間に厳しいことに気づかされた経験、3.11のときの自身の経験などを挙げ、まとめるとそれらは「日本に来て変えられたこと」だとした。例えば、「Looking like this & Speaking Japanese」「Positive Racial Bias」は日本に来なければわからないことで、「running on time」「apologizing」は長く日本に滞在してから帰国し

たことでわかったこと、「Things People I miss about Japan」は日本を離れないとわからないことだとした。

CL3「Learning Japanese」では、協力者Cは連想語のまとまりを見て、来日間もないときに病院に付き添ったことがきっかけで友人になり、日本語学習などのいろんな話題で深い話ができる特定の友人のこと、そして国の大学の日本語の先生2名の顔を思い出すとした。このまとまりに出てくる連想語は日本語の勉強のしかたもだが、日本語の上達をどう測るかということに関わってる。渡日してすぐの外国人は「Oh so are you fluent?」という質問をよくするが、日本語は勉強し始めたら、日本語習得が「富士山を登ろう」とするほど大変なことかと思うし、帰国子女のような事例は別として、母語でなければ fluent になることはないと思う。「not fluency, like high level of accuracy, and a lot of vocabulary sure, but no never fluency, It's a stupid question」で、新しい外国人とはつねにこういった問題を乗り越えなくてはならないとした。

CL4「Cultural Exchange」では、Church friends、Roommates、People who I miss in Australia、Dad、つね先生など人の顔を思い出すと述べた。Church friends は礼拝をしたり、ハイキングをしたりする顔、Roommates は毎日会う家族のような存在で「すっぴん」のときや「メイクした」ときの顔、Dad は盆栽を見ている横顔だとした。そのほか、大学留学時代の友人の顔を挙げるとともに、「Things I miss about Australia」はイトーヨーカドー級の大きな、そして通路が広いスーパーマーケットを挙げた。店内での品探しがオーストラリアでは簡単だが、日本の場合、同じ缶詰でも、魚、フルーツ、トマト、中華料理の具材などで売り場が異なり日本人のように考えないと見つけられないと言う。その他に運転中に開けた窓から入ってくる熱い風、ユーカリの木、色鮮やかな鳥を挙げた。

「Persimmons」「Flavors / Foods I got to know here: sesami, ponzu, れんこん、ごぼう」の連想語からは、小学校6年生のときに、自分で作った日本の料理（お好み焼き）を思い出し、自身は（漫画やアニメではなく）食べ物を通して日本に「入った」と述べ、国では妹がくれた料理本を見て日本料理に挑戦していたことや、日本留学中にいろいろな味噌汁を作って自分の好きな具材を見つけたこと、日本人の友人と車で四国うどんツアーをしたことやそのときの地元のうどん店との交流などを語った。

次にCL間の関係について見る。CL1「Connections, Flows, Hellos & Goodbyes」とCL2「realizations」の両方に、親しくなった人、自身にいい影響を与えてくれた職場、ストレス解消、時間の流れ、新しく始めたことなどが含まれているとした。相違点は時間の幅で、CL1の方が「スパン」が大きく「永遠」という感じがすると述べた。CL1「Connections, Flows, Hellos & Goodbyes」とCL3「Learning Japanese」の共通点は、大学時代の留学先で出会った友人が共通点になるとした。CL1「Connections, Flows, Hellos & Goodbyes」とCL4「Cultural Exchange」の共通点は自転車に乗っている風景と、その時の香り（きんもくせい）で、「Being here long enough to gain and lose 日本人友達」と「Japanese food」が共通しているとした。CL1とCL4

との相違点は、CL4のほうが特定の時に起きた出来事を想起しているとした。CL2「realizations」とCL3「Learning Japanese」の共通点は「日本語」で、例外もあるが、長く日本にいれば日本語が上達するし、日本の文化の中で文化の中で礼儀正しく生きるならこのように行動したほうが良いと気づき行動を変えたりすると述べた。どちらもグループ参加や団体行動のイメージがあるが、CL2のほうが何かを見たり食べたりする体験を伴い、CL3のほうが日本語を身に付けることなど、頭の中のプロセスに関わる内容だとした。

CL2「realizations」とCL4「Cultural Exchange」は、共通点があまりなく、CL2は繰り返して行っていること、CL4はピンポイントなことだとした。CL3「Learning Japanese」とCL4「Cultural Exchange」については、共通点が「つね先生」で、相違点はCL3が言語、CL4が文化に関することだとした。最後にCL全体を「My life in Japan」とした。

CL間の関係についての発話から、協力者Cが、「永遠」に近い時間軸の中で出会った友人や職場の人との接触経験（CL1）は、そのときどきの記憶に残る具体的な体験の数々（CL2）で構成されており、それらは、中等教育期間に出会った日本人の先生を通じて知った日本文化や食べ物と通じて知った日本文化（CL4）と、「富士山に登る」ように果てしない努力を必要とする日本語学習（CL3）と融合する形で連想語のまとまり全体「My life in Japan」を成立させていることが読み取れる。

インタビュー時の協力者Cの意識が、どのような経験に基づいているかを丁寧に見ていくために、TEM図を描くためのインタビューを2回実施した。次節ではこれらのインタビューを踏まえて作成されたTEM図を示し、分析を行う。

4.2 TEM図に基づく分析

4.2.1 分析のための枠組み

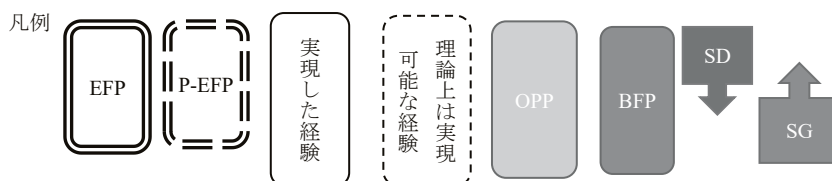
まず、TEM図を描く上で必要な概念は、等至点（Equifinality Point: EFP）、第2の等至点（2nd Equifinality Point: 2nd EFP）、両極化した等至点（Polarized Equifinality Point: P-EFP）、分岐点（Bifurcation Point: BFP）、必須通過点（Obligatory Passage Point: OPP）、社会的方向付け（Social Direction: SD）、社会的助勢（Social Guidance: SG）の5点である（安田・サトウ、2012）。本研究における概念の意味は表3の通りである。

表3 TEM図に関わる諸概念と本研究における具体的概念

概念	本研究における具体的良く意味
等至点 (EFP)	日本や日本語と関わりを持ち続けて生きること
両極化した等至点 (P-EFP)	日本や日本語と関わりを持ち続けて生きることを諦める
分岐点 (BFP)	① 交換留学を検討 ② 広島的女子校に留学する ③ 大学時代に交換留学をする ④ 大学を卒業、アルバイトを継続する ⑤ 大学院（博士課程）生活開始当初リズムが作れない ⑥ クリスマスのために一時帰国する ⑦ 大学院（博士課程）を満期退学する
必須通過点 (OPP)	① 日本がいいと思う ② 自分にとって Comfortable な場所で生活したいと思う (ずっとではないかもしれないが、それが今は日本)
社会的方向付け (SD)	① AFS の年齢制限 ② 日本語でたくさん話しかけられるし、英語も使えない ③ 教会からのケアが不十分（言語の問題、物理的問題） ④ 日本語をたくさん勉強しなくてはならない ⑤ 気候の違い（太陽が足りない） ⑥ 日本語ができるのに英語で話しかけられる ⑦ 生活の問題（経済的問題、ビザの問題） ⑧ 友達の不在、友達の存在
社会的助勢 (SG)	① 信仰（教会、牧師、神との交わり、祈り、神に導かれる） ② 家庭環境（両親やきょうだいも海外に目を向けている、子どもの自立を促す母親の存在、両親のサポート） ③ 初中等教育段階における外国語教育という国策 ④ 料理・食文化への関心 ⑤ Defer 制度 ⑥ 留学制度（高校段階、大学の交換留学） ⑦ 奨学金制度 ⑧ 困難なことに挑戦する性格的要因 ⑨ 友達の存在 ⑩ 将来の見通し、仕事の達成感 ⑪ 日本語ができる（何でもできる、表現できる）

4.2.2 日本・日本語と関わって生きることに對する協力者Cの意識の変容

以下は、本研究が分析の対象としたTEM図の凡例（図2）と、協力者CのTEM図（図3）である。



協力者 C が EFP「日本や日本語と関係を持ち続けて生きる」に至るまでの経験を TEM 図（図 3）に表し、TEM 図の全体像を下の第Ⅰ期から第Ⅶ期の 7 つの期間に区分した。

- 第Ⅰ期 日本・日本文化に関心を持つ
- 第Ⅱ期 大学で日本・日本語を学ぶ
- 第Ⅲ期 大学への交換留学を経験する
- 第Ⅳ期 日本の大学院に留学する
- 第Ⅴ期 ホームシックになる
- 第Ⅵ期 日本が居場所だと感じる
- 第Ⅶ期 退学後

各区分ごとに、表 3 で表した BFP ①～⑦の分析結果を中心に、協力者 C の語りを記述する。

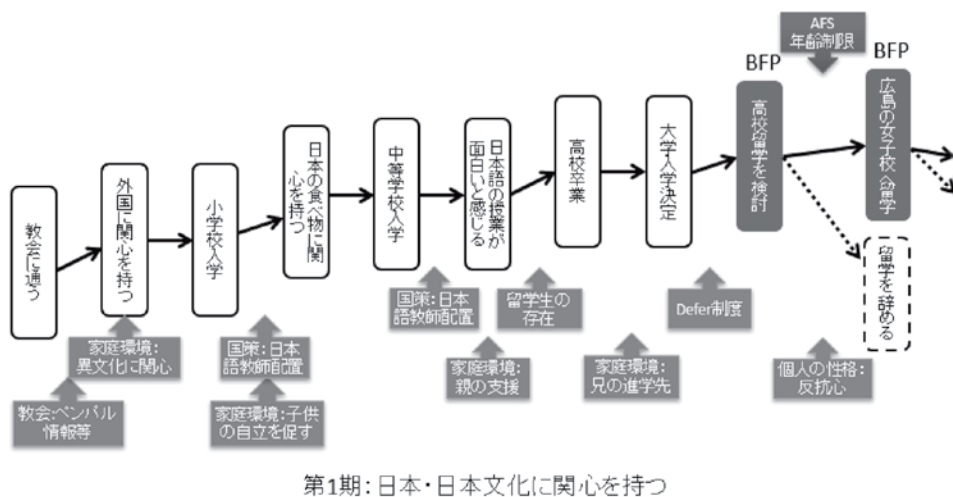


図 3-1 協力者 C の TEM 図（1/4）

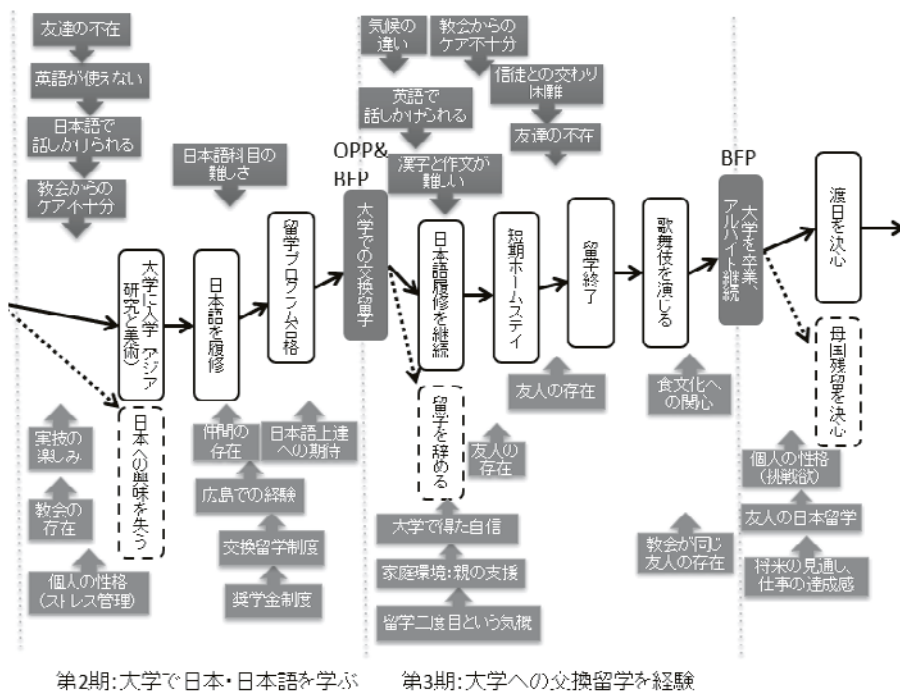


図 3-2 協力者 C の TEM 図 (2/4)

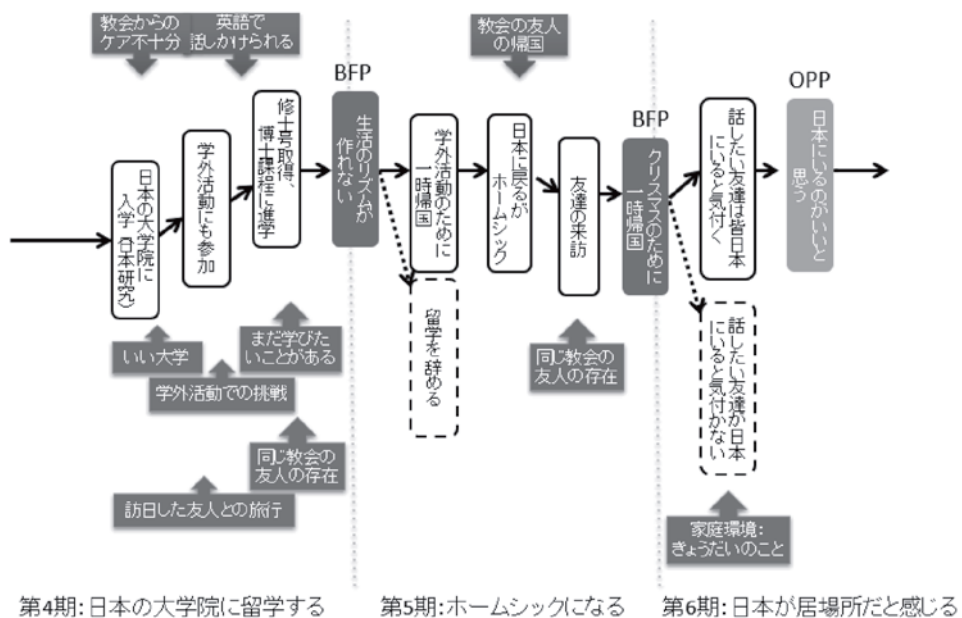


図 3-3 協力者 C の TEM 図 (3/4)

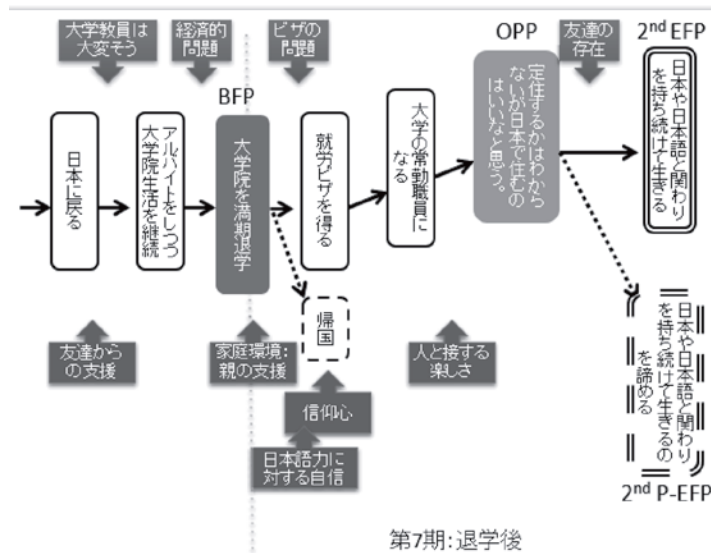


図 3-4 協力者 C の TEM 図 (4/4)

(1) 第Ⅰ期 日本・日本文化に関心を持つ：BFP ②まで

協力者 C は Primary school の時に日本語と出会う。これは年少者対象の外国語教育を推進するという国策の後押しもあったが、毎週の礼拝を欠かさない、敬虔なクリスチ안의家庭に育ったという背景がある。協力者 C としては、当時日本に興味あったのか、外国に興味あったのかは定かでなく、教会の宣教師の活動などから外国への意識を喚起され、定期的にいろいろな国の人とペンパル的な活動として手紙の交換などを行っており、オーストラリアの田舎育ちであったが、「意外と外向き」であった。また、料理にも関心があり、母親が看護師で勤務がシフト制だったこともあり、レシピが読めるようになったころから、料理をするようになった。Primary school でお好み焼きや抹茶アイスなど日本の食べ物が紹介され、日本の料理を作ったりもした。また生来人とコミュニケーションをとることが好きで、高校時代に高校を訪問してきた日本人の「つね先生」の訪問があり、高校が毎年ロータリーの留学生を受け入れていたことや、父親が「盆栽」を趣味にしていたこと、兄がタイや韓国に留学したことなどが影響して、自分も留学を考えるようになった。人口約 10,000 人で小学校も高校も各 2 校の規模なので、同じ年齢の友人とのつながりが強かったが、すごく辛く、同時によいことがあり人生経験が深まった、広島での留学経験（1 年間）により、高校の同窓生でそのまま地元に残っている人と自身との違いを大きく感じ、そのコミュニティを自ら出ることになった。

(2) 第Ⅱ期 大学で日本・日本語を学ぶ：BFP ③まで

兄に留学中の経験を深く聞かずに、広島に留学した。当時はインターネットもなく、留学派遣団体からは「辛くてもすぐに（家族に）手紙を書かないように」と指導を受けており、ストレス

がある経験でも自分から国の家族に連絡をしたり周囲に相談したりしなかった。聖書を読み、教会にも通っていて、信者もたぶんいい人だったのだが、日本語でのコミュニケーションで周囲も「どうしよう」という反応でなじめなかった。その後最寄りの駅で掲示してあった教会のチラシによって、英語礼拝がある教会に出会うことができ、言語（英語）による周囲との意思疎通ができるようになった。学校でも、（おそらく）自身の誤解により問題もあつたりした。最初にもらった手紙の質問には「オーストラリアとどう違います」というものがあり、違いに焦点を当てると不満ばかりが生まれ。言語ができないことで周囲が何を言っているかわからない赤ちゃん状態になっていて、日本文化になじんでいない不満が生まれていることに気づいて、そのあとからは文化的な差異には触れず、「I'll just go with the flow」と思うようにした。ストレス解消は、言語がいらぬ活動、例えば高校の体育、コンピュータ・タイピング、音楽、家庭科（裁縫と料理）があつた。家庭科の料理ではすべて計量する点やエプロンと三角巾を用意するところなどを珍しいと思った。2件目のホストファミリーは、お母さんが留学生受け入れのベテランで、近くの公民館に連れて行ってくれ、そこで太鼓や盆踊りといった活動を通して別世界に触れることができた。茶道もよかった。これらの経験を通して留学してよかったと思え、神様はどこにでもいるということを感じた。

大学では Asian studies and arts を専攻、日本語と社会言語学、現代アート社会の2つの学位を取得するコースを選んだ。進学先の選択は、交換留学制度があることと defer という、入学決定後に入学時期を遅らせることができる制度があることが決め手となった。初回の留学は日本語ができなくて少し苦労したが、そのおかげで、進学先の大学の日本語のクラスは2年生のクラスに入ることができた。進学先の大学の日本語プログラムは、自分に留学経験がなかったら、きつすぎて大変だったと思う。

入学後は、しばらく日本に行かなくてもいいと思っていた。広島への留学で疲れてたことと、学部で日本語を必死で学んでいたことがある。日本語の専攻は1年半で修了した後、数か月はバーンアウトした状態で日本語以外の科目を履修していた。それがよかったのか、掲示板に留学の募集要項が出ているのを見て、気軽に申請した。留学決定の通知があつた日は嬉しくて飛び跳ね、ねんぞするほどだった。うれしさの理由は、もう1度日本へ行けること、そして成長した自分、つまり日本語ができる状態で行け、さらに日本語力を磨けるということだったと思う。バーンアウトの時期がなかったら、交換留学先でがんばれなかったと思う。

(3) 第III期 大学への交換留学を経験する：BFP ④まで

金沢もよかったが、晴れが少ない天候が合わなかった。なぜか落ち込むことがあつたが、今思うと、オーストラリアで育った自身にとっては太陽の日差しが足りなかったせいだと思う。そのころ、授業での formal Japanese はもう十分という気持ちになっていた。それで日本語を流暢に話す友人と飲みに行くなどして、別の方向から日本語学習にアタックしていた感じがする。そんなときに、「カライモ交流」のポスターを見て、また、それに申し込んでいる友人に影響されて

参加することにした。青春 18 きっぷを買って大阪まで移動するというめったにない経験ができ、楽しかった。その経験があって、『西郷どん』（NHK 大河ドラマ）を見ても楽しくてたまらない。留学先の大学では、勉強しないでプレイスメントテストを受けた結果、自分の想定よりも低いレベルに判定され嫌だった。

（礼拝の言語が）日本語の教会に行ったが信徒との交わりや教会のケアが十分でなく、今思うと自分から中に入っていけばよかったと思うが、当時は「何もされない」という気持ちになっておりあまり通わなかった。しかし、キャンパス内にある聖書研究会のメンバー（2名）と交流できた。クリスチャンは1人ではだめで、同じ方向を向いている人との交わりが必要だと感じた。そんな折に自身にとって重要人物となる友人にも出会えた。寮が同じでいろいろ話することができ、ストレスから逃れることができた。その友人も英語を話したが、この時の留学は、日本人と話す機会や日本語で話す機会が非常に多くあり、上達したという達成感をもって帰国した。帰国後まもなく、帰ってからすぐに、学部で企画で歌舞伎を演じることになった。古い日本語に触れ、本当に面白かった。Honors の論文はよい出来で卒業した。卒業後は、単純作業（在庫管理）をするアルバイトを継続していたが、大学を卒業し、いろいろなスキルがあるのに自分の力を十分に生かしていない、自分は何をしているのだろうと感じるようになり、次のステップを考えるようになった。

（4）第Ⅳ期 日本の大学院に留学する：BFP ⑤まで

日本で大学院に通っている国の友人がいたので、自分もまた奨学金もらって修士取得を目指せるかもしれない考えるようになった。進学先は大学ではなく、指導を受けたい先生で探した。Honors の論文に取り組んでいるときに、食文化にも関心があってインターネットで検索していたときにその先生を探し当てたのがきっかけになっている。進学してから、その大学の名声を知って驚いた。

（5）第Ⅴ期 ホームシックになる：BFP ⑥まで

修士号を取得し博士課程に入ったが、その次の進路について決めかねていた。研究は非常に好きだが、大学の教員は研究と教育といろいろ同時にしなくてはならず、自身が望む職ではない。だから、Ph.D を取っても大学の講師になろうと思ってなかったので、先が見えなかった。また、博士課程に入ってからトラブルが多く、うまくリズムが作れず、深刻なホームシックになった。それで、よく帰国していた。しかし、最後まで続けられるかわからないが、まだ勉強したいことがあるとも思っていた。

（6）第Ⅵ期 日本が居場所だと感じる：BFP ⑦まで

そのような状況でクリスマスに帰国をし、1か月の滞在を予定していたのだが、1か月が長すぎたのか、突如として日本に戻りたい自分に気が付いた。自分のことを知っていて、理解してく

れる人と話したいと思ったし、自身が居心地がいいと思える場所にいたい、「I just wanna talk to people who understand me and know me and I wanna be in a place where I feel comfortable. 」と思った。母国と日本の位置付けが逆になったと感じた。それで日本に戻り研究を続け、満期退学をした。

(7) 第VII期 退学後：BFP⑦以降

満期退学後3つのアルバイトを同時にしていて週6日働いていた。とても疲れたときには帰りたいと思うし、帰国するという選択肢はいつでもあると思う。仕事や信仰のことなど状況によって話したい相手は違うが、日本には、状況に合わせて話す相手がいる。

教会は、日本にいるから日本人のクリスチャンと交わりたいという気持ちがあって日本語の礼拝に通っていたが、今は英語礼拝にも通い始めた。信仰も仕事もジムも、外国人、日本人の友人の割合はアップダウンがある。現在のフルタイムの仕事が決まってからは、忙しくなり、それまで行っていたアルバイトからは離れることになった。フルタイムの仕事があり、生活は安定しているが、同じ大学出身の友人の現在のポジションと比較してしまい、気持ちが「谷」に入ってしまうときもある。

4.2.3 日本・日本語と関わって生きることに對する協力者Cの徑路に影響を与えたSDおよびSG

本節ではどのような経験が日本・日本語と関わって生きることに影響を与えているのかを考察するために、協力者Cの意識の変容に影響を与えたと思われるSDとSGを見ていく(表3)。まずSDは、日本で働き生活するという強い希望の実現を阻害した要因である。協力者Cにとっては、「AFSの年齢制限」「日本語でたくさん話しかけられるし、英語も使えない」「教会からのケアが不十分(言語の問題、物理的問題)」、「日本語をたくさん勉強しなくてはならない」、「気候の違い(太陽が足りない)」、「日本語ができるのに英語で話しかけられる」、「生活の問題(経済的問題、ビザの問題)」、「友達の不在、友達の存在」の7つである。

これらを大きく分類すると、留学の実現や継続に関わる要因「AFSの年齢制限」、「生活の問題(経済的問題、ビザの問題)」と、自然環境「気候の違い(太陽が足りない)」、言語的要因「日本語でたくさん話しかけられるし、英語も使えない」、「日本語をたくさん勉強しなくてはならない」、「日本語ができるのに英語で話しかけられる」、人的要因「教会からのケアが不十分(言語の問題、物理的問題)」、「友達の不在、友達の存在」に整理できよう。

言語的要因は、第I期の初めての留学では英語が使えず、日本語で話しかけられることがマイナスに働き、第IV期の留学時は、英語で話しかけられることがマイナスに捉えられていた。人的要因については、クリスチャンとして同じ方向を見ている人たちとの交流が欠如したことや、友人と自身とを比較してしまうことなどがSDになっている。

一方、SGは「信仰(教会、牧師、神との交わり、祈り、神に導かれる)」、「家庭環境(両親や

きょうだいも海外に目を向けている、子どもの自立を促す母親の存在、両親のサポート)」、「初中等教育段階における外国語教育という国策」、「料理・食文化への関心」、「Defer 制度」、「留学制度（高校段階、大学の交換留学）」、「奨学金制度」、「困難なことに挑戦する性格的要因」、「友達の存在」、「将来の見通し、仕事の達成感」、「日本語ができる（何でもできる、表現できる）」の9つがある。

これらは、留学の実現や継続に関わる要因「初中等教育段階における外国語教育という国策」、「Defer 制度」、「留学制度（高校段階、大学の交換留学）」、「奨学金制度」と、言語的要因「日本語ができる（何でもできる、表現できる）」、人的要因「信仰（教会、牧師、神との交わり、祈り、神に導かれる）」、「家庭環境（両親やきょうだいも海外に目を向けている、子どもの自立を促す母親の存在、両親のサポート）」、「友達の存在」、そして、個人の性格や心的状態「料理・食文化への関心」、「困難なことに挑戦する性格的要因」「将来の見通し、仕事の達成感」に整理できる。

敬虔なクリスチ안의家庭に育ち、幼少期から教会での活動の中で海外に目を向ける経験が重ねられてきたことと、初中等教育段階に外国語学習の機会を与えるという国の言語政策があつて、協力者Cは「つね先生」に出会い、日本の食文化などに親しみを持つようになる。協力者Cの3度の留学はどれも奨学金制度に支えられており、また大学の Defer 制度も協力者Cに留学の道を開いた。初回の留学は、年齢的に若かったこともあるが、言語面の課題が人的ネットワークに大きく影響したが、その際には、母語の英語による礼拝に参加できたことが、環境改善のきっかけになった。信仰上のネットワークは、初回の留学だけでなく、同じ方向を見ている人と交わりた、日本にいるから信仰面でも日本人と交わりた、また母語である英語での礼拝に参加するようになったなど、どの留学の段階でも語られており、協力者Cの精神的な支柱になっていることがうかがえる。また、留學生活での「友達の存在」は、留學先で出会った留學生の友人、寮生活を共にする友人、聖書研究会でできた友人、ジムの友人、他大に通う同国の友人、職場の友人と、協力者Cの様々な生活領域に友人ができていき、状況に合わせて話す相手がいる現在、日本が「a place where I feel comfortable.」となっている。協力者Cは、長期的なゴールを設定してキャリアを積むことはしていないが、各 BFP では、進路の選択に影響を与えた「困難なことに挑戦する性格的要因」に関わる発言がある。この困難なことに挑戦する性格が、協力者Cを複数回の留學経験に誘い、留學生活を継続させた結果、日本が自身にとって居心地のいい場所になっていたと思われる。

5. 考察とまとめ

本稿は PAC 分析インタビューと TEM により協力者Cが EFP「日本や日本語と関係を持ち続けて生きる」に至る径路を分析し、日本・日本語と関わって生きることに対する調査協力者Cの径路に影響を与えた SD および SG を捉えた。

本稿は、日本での1年の交換留学を経て大学を卒業し、日本に住み、働き続けることを選択し

て数年以上経過した元日本語学習者が、日本での日本語学習や経験をどのように意味づけているかを分析することを試みた。協力者Cは、丸山・小澤（2018、2019、2020）と共通して、日本に住むことに魅力を感じているが、特徴的なのは、その魅力が、協力者CがPAC分析インタビューの中で詳述されたような、個別具体的な経験の蓄積によって人的ネットワークをいろいろな領域に構築し、仕事や信仰のことなどの領域やそのときの状況によって話したい相手、つまり自身を知り理解してくれる人が「日本」にいて感じている点である。国に戻ることは常に選択肢にあるものの、日本が「a place where I feel comfortable.」となっている。

また、言語についても注目したい。協力者Cにとって信仰と人との交わりは人生の重要な要素となっているが、これらが言語使用と密接な関係にあることも観察され、その時期の協力者Cの日本語力によって、「日本語環境との接し方」を促進する記号にも阻害する記号にもなっていることがわかった（小澤・丸山、2019）。

日本語学習についても見ておきたい。PAC分析インタビューでは、「Learning Japanese」のCLで「富士山に登る」ように果てしない努力が必要だという日本語学習観や、日本語が上達することに対する自身の考えが詳述された。TEM図にもとづいたインタビューでも、協力者Cが第Ⅰ期から継続的に取り組み、また力を伸ばしてきたことが確認されたが、第Ⅲ期の交換留学の際には「授業での formal Japanese はもう十分という気持ちになっていた。それで日本語を流暢に話す友人と飲みに行くなどして、別の方向から日本語学習にアタック」するなど、日本語学習への取り組み方には変化がある。さらに、留学先の気候が当時の本人の意識に及ばない形でSGとして働くことも、今回の分析を経て確認できた。

留学先の日本語教育に従事する者にとっては、本研究は、学習者の人生のステージやその時の日本語力をはじめとする様々な要因によって、日本語の位置づけも日本語学習への姿勢も変化する単純ではない日本語学習者の姿を理解する機会になる。また、本稿のOPPである「定住するかはわからないが日本で住むのはいいなと思う」に至る径路に見られるSGに、例えば制度や人的ネットワーク、言語面など、日本語教育が緩やかに、そして多様な形で関与できる可能性があることを見いだせた。

本研究は、4±1人を対象とした分析から多様性の可視化を試みる前段階として、丸山・小澤（2018、2019、2020）に続く、4人目の調査協力者として、協力者Cを取り上げた。4名の共通点として「日本で生きて行こう」と思う前の段階に「日本でやっていけるという確信を持つ」というOPPがあり、日本語力がSGとして存在している可能性が高いことが見てとれた。また、それぞれの径路において様々なSDやSGが作用していることも明らかになった。しかし、BFPで径路の分岐を促す、あるいは抑制する記号の作用については、これまでの研究では未だ十分に分析できていない。今後の課題として、多様性の可視化を進めるとともに、BFPで生じている促進的記号・抑制的記号を特定し、それらの記号の働きをより丁寧に分析した上で、SDやSGとの関係性を考察することが挙げられる。

注

- 1) 本研究は科学研究費「「移動して学ぶ」時代の日本語教育——留学体験の意味づけの変容」(基盤(C)課題番号 16K02824)の研究活動の一部である。
- 2) 本稿は、小澤・丸山(2019)に大幅な加筆修正を行ったものである。

参考文献

- JACET SLA 研究会(2000)『SLA 研究と外国語教育』リーベル出版
- 有川友子(2010)『日本留学のエスノグラフィー——インドネシア人留学生の20年』大阪大学出版会
- 上村佳世子(2018)「文化心理学」能智正博他(編)『質的心理学辞典』277 新曜社
- 小澤伊久美・丸山千歌(2019)「留学体験を持つ日本語学習者 X が日本に住み、働き続ける径路——X は分岐点でどのような葛藤を経験しているか——」沖縄県日本語教育研究会、琉球国際大学、2019年3月9日
- 木戸彩恵・サトウタツヤ編(2019)『文化心理学：理論・各論・方法論』ちとせプレス
- 佐藤正則(2015)「なぜ私は学習者のライフストーリーを聴き続けるのか 日本語教師としての私の構えを記述することの意味」館岡洋子編『日本語教育のための質的研究入門 学習・教師・教室をいかに描くか』pp.117-137、ココ出版
- 内藤哲雄(2002)『PAC 分析実施法入門 [改訂版]「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- 入国管理局(2018)「入管法および法務省設置法改正について」『入国管理局ホームページ』http://www.immi-moj.go.jp/hourei/h30_kaisei.html (2018年12月24日アクセス)
- 文化庁(2019)「日本語教育の推進に関する法律の施行について(通知)」https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/other/suishin_houritsu/1418260.html (2020年1月7日アクセス)
- 文野峯子・浜田麻里・林さと子・福永由佳・宮崎妙子(2006)「日本語学習者と学習環境の相互作用をめぐる」『日本語教育の新たな文脈——学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性』、67-102.
- 丸山千歌(2016)「学習者要因の分析①——PAC 分析を活用した研究」徐敏民・近藤安月子編『日本学研究叢書 日語教学研究』pp.362-384、外語教学与研究出版社
- 丸山千歌・小澤伊久美(2011a)「日本語学習者が読解教材から連想するイメージ——PAC 分析法を活用した留学前・中・後の縦断研究から——」2011年度異文化間教育学会第32回大会、於お茶の水女子大学、2011年6月11日(発表抄録集 154-155)
- 丸山千歌・小澤伊久美(2011b)「ステレオタイプの読解教材に学習者の留学経験はいかに反応するか——日本語学習者に対する PAC 分析法による縦断的研究からの示唆——」徐敏民編『日語学研究』、pp.203-213、華東師範大学出版社
- 丸山千歌・小澤伊久美(2018)「ある翻訳者が自立に至る径路——移動して学ぶある時代の日本語教育への示唆——」『日本語・日本語教育』1、19-35.
- 丸山千歌・小澤伊久美(2019)「日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触——日本に住み、働きつづける日本留学経験者 B の場合——」『日本語・日本語教育』2、19-38.
- 丸山千歌・小澤伊久美(2020)「日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触——日本に住み、

働きつづける日本留学経験者Dの場合——」『日本語・日本語教育』3、33-47.

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編（2015）『ワードマップ TEA 理論編』新曜社

安田裕子・サトウタツヤ編（2012）『TEM でわかる人生の経路——質的研究の新展開』誠信書

安田裕子・サトウタツヤ編（2017）『TEM でひろがる社会実装——ライフの充実を支援する』誠信書房